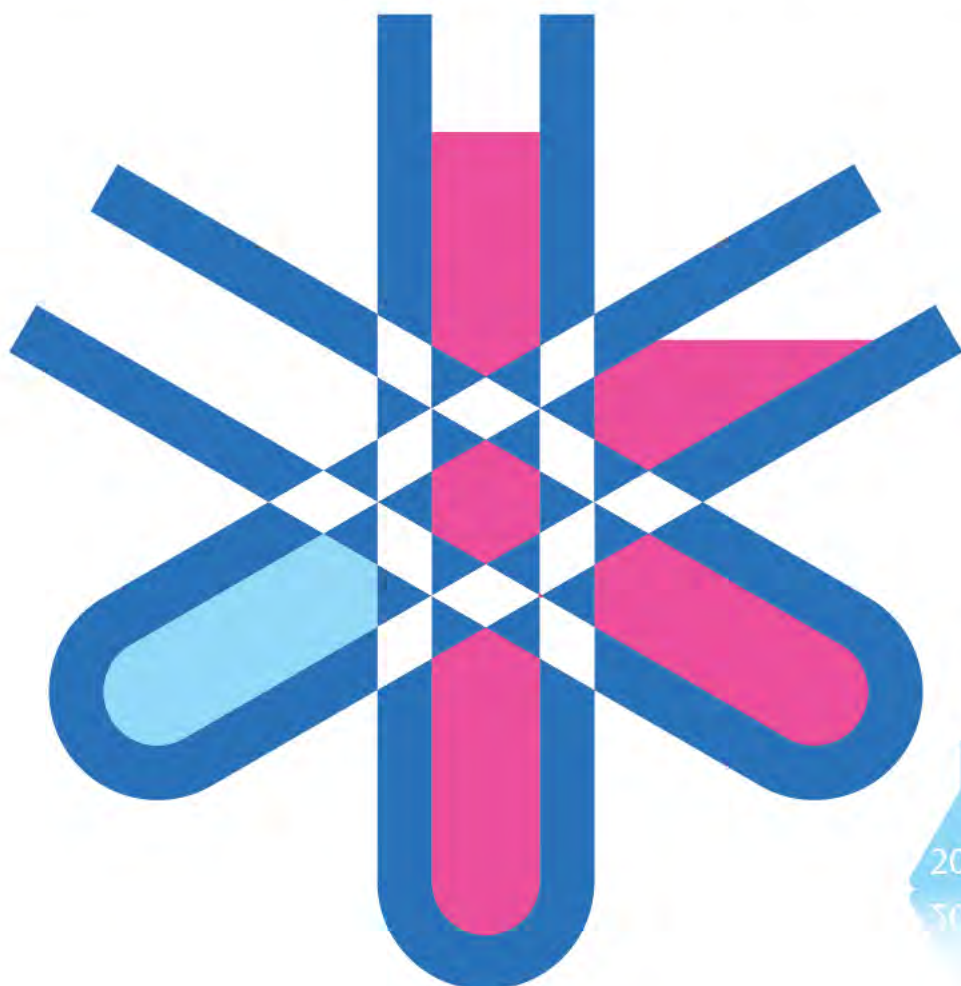


検査情報月報



2011
7月

横浜市衛生研究所

平成23年7月号 目次

【トピックス】

平成22年度 薬事検査について	1
遺伝子組換え食品の検査.....	2
平成23年度 医動物・種類同定検査のまとめ(4~6月)	4

【感染症発生動向調査】

感染症発生動向調査委員会報告 平成23年6月	5
------------------------------	---

【情報提供】

衛生研究所WEBページ情報(平成23年6月分)	10
-------------------------------	----

平成22年度 薬事検査について

平成22年度は健康福祉局医療安全課の依頼により、いわゆる健康食品、化粧品の試買検査及び健康被害事例の原因究明等について検査を実施しました。

1 いわゆる健康食品等の検査

「ダイエット」、「痩身」等を標榜している「いわゆる健康食品」10検体について、センナ、フェンフルラミン、N-ニトロソフェンフルラミン、エフェドリン、プソイドエフェドリン、メチルエフェドリン、ノルエフェドリン、甲状腺ホルモンの検査を行いました。その結果、いずれの成分も検出されませんでした。

また、強壯効果を標榜する「いわゆる健康食品」10検体について、シルデナフィル、タダラフィル、バルデナフィル、ホンデナフィル、キサントアントラフィル、チオキナピペリフィル、メチルテストステロン、ヨヒンビンの検査を行いました。その結果、いずれの成分も検出されませんでした。

さらに、ヘアケアを標榜する「いわゆる健康食品」5検体について、ミノキシジル、フィナステリド、デュタステリド、エストラジオール安息香酸エステルを検査を行いました。その結果、いずれの成分も検出されませんでした。

2 化粧品検査

化粧水、クリーム5検体について、配合が禁止されている成分のクロロホルム、メタノール、ホルマリン、水銀、カドミウム、配合が制限されている成分のパラオキシ安息香酸メチル、パラオキシ安息香酸エチル、パラオキシ安息香酸プロピル、パラオキシ安息香酸イソプロピル、パラオキシ安息香酸ブチル、パラオキシ安息香酸イソブチル、さらに医薬品成分であるデキサメタゾン、酢酸デキサメタゾン、ヒドロコルチゾン、酢酸ヒドロコルチゾン、コハク酸ヒドロコルチゾン、吉草酸ヒドロコルチゾン、プレドニゾン、コハク酸プレドニゾン、ベタメタゾン、酢酸ベタメタゾン、吉草酸ベタメタゾン、ジプロピオン酸ベタメタゾン、プロピオン酸クロベタゾール、ジプロピオン酸ベクロメタゾン、ピバル酸フルメタゾン、トリアムシノロンアセトニド、フルオシノロンアセトニド、アムシノニド、ハルシノニドの検査を行いました。その結果、いずれの成分も検出されませんでした。

3 健康被害に係わる検査

医療安全課の依頼により、健康被害の疑われる事例の3検体について、原因究明のための検査を行いました。その結果、電子タバコのカートリッジ1検体からニコチン、いわゆる健康食品1検体からヨヒンビンが検出されました。

【 検査研究課 薬事担当 】

遺伝子組換え食品の検査

遺伝子組換え食品は、内閣府にある食品安全委員会で安全性に問題ないと判断され、承認されたものが国内で流通可能になります。検査は、承認済みのものについては定量検査(食品中に遺伝子組換え体がどのくらい含まれているかを調べる検査)を行います。一方、未承認のものについては定性検査(食品中に遺伝子組換え体が含まれているかを調べる検査)を行います。

今回は、平成23年5月に、各区福祉保健センターが収去した計20検体について、遺伝子組換え食品の定量検査と定性検査を実施しました。

1 定量検査

豆腐9検体及び大豆水煮1検体について、ラウンドアップ・レディー・大豆を検査しました。また、トウモロコシ粉砕品2検体について、Event176、Bt11、T25、Mon810及びGA21トウモロコシの5種類を検査しました。その結果、いずれも混入率は5%以下*1であり、違反検体はありませんでした(表1、2)。

表1 ラウンドアップ・レディー・大豆の検査結果

品名	原産国	検体数	混入率5%を超える検体数
豆腐	日本	9	0
大豆水煮	日本	1	0

表2 Event176、Bt11、T25、Mon810及びGA21トウモロコシの検査結果

品名	原産国	検体数	混入率5%を超える検体数
トウモロコシ粉砕品	アメリカ	2	0

*1 承認済みの遺伝子組換え食品は、混入率が5%を超えると表示義務が生じます。一方、5%以下ならば表示義務はありません(ただし、書類等で確認ができること、かつ、意図的に遺伝子組換え食品を混入していないことが前提になります)。そのため、検査では混入率が5%を超えているかどうかを調べます。

2 定性検査

菓子類8検体及びトウモロコシ粉砕品2検体についてBt10トウモロコシの定性検査を行いました。その結果、いずれも不検出であり、違反検体はありませんでした(表3)。

表3 Bt10トウモロコシの検査結果

品名	原産国	検体数	検出数
菓子類	日本	8	0
トウモロコシ粉砕品*	アメリカ	2	0
計		10	0

* トウモロコシ粉砕品2検体は、定量検査と同一検体

※ 今回検査した検査項目の解説は、次ページを参考にしてください。

【解説】

○ ラウンドアップ・レディー・大豆

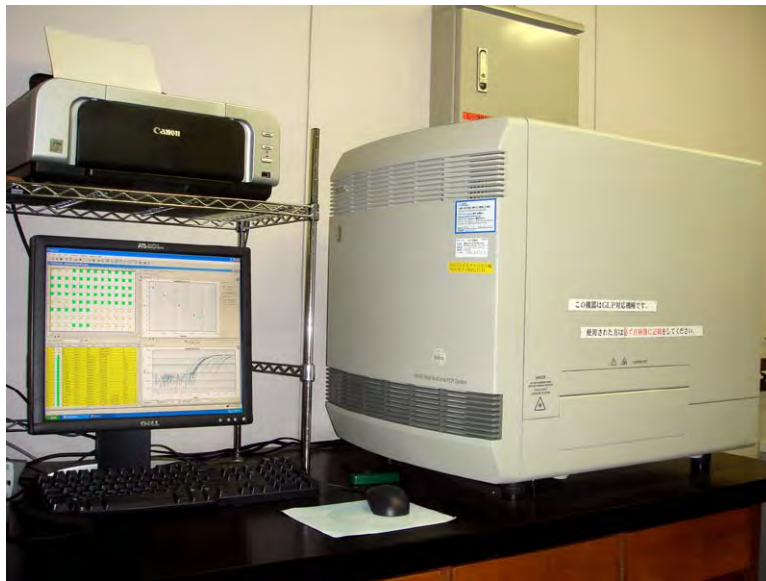
除草剤耐性を持つ遺伝子を組み込んだ大豆です。最も流通している遺伝子組換え大豆であり、アメリカなどで広く栽培されています。日本では、平成13年に安全性審査を経ています。大豆の定量検査としては、ラウンドアップ・レディー・大豆だけが国から検査法が示されています。

○ Event176、Bt11、T25、Mon810、GA21トウモロコシ

除草剤耐性や害虫抵抗性を持つ遺伝子を組み込んだトウモロコシで、いずれもアメリカなどで栽培されています。日本では、いずれも平成13年に安全性審査を経ています。トウモロコシの定量検査としては、この5種類について国から検査法が示されています。

○ Bt10トウモロコシ

除草剤耐性と害虫抵抗性を持つ遺伝子を組み込んだトウモロコシです。アメリカで誤って栽培・流通し、アメリカ国内に広がったとされています。日本でも安全性審査を経ていないため、販売等が認められていません。



検査に使用している遺伝子を増幅させるための装置(リアルタイムPCR装置)

【 検査研究課 食品添加物担当 】

平成23年度 医動物・種類同定検査のまとめ(4～6月)

医動物担当では、市民、各区福祉保健センター、各市場検査所、事業者などの依頼を受け、昆虫類を中心とした種類同定検査を行っています。昆虫類の種類を同定することによって、発生源、発生時期、人に対する害などが分かるため、効果的な対策を立てることにつながります。平成23年4月から6月の種類同定検査件数は、5件でした。内訳は昆虫類3件(ハエ目・シロアリ目・トビムシ目各1件)、その他2件でした。

相談内容・発生状況等	写真 (状態、体色、大きさ)	同定結果	生態・その他
マンション入り口部分にみられた	 成虫、黒色、約7mm	ヒメイエバエ (ハエ目イエバエ科)	ヒメイエバエは早春から出現し、家の中で輪を描くように飛び回る。幼虫は動植物の腐敗物、家畜の糞、生ごみ、漬物、油粕などあらゆるものから発生する。日本広く分布し、代表的な屋内性のハエである。
戸建住宅の2階床で発見した	 有翅虫、黒色、約6mm	ヤマトシロアリの有翅虫* (シロアリ目ミゾガシラシロアリ科)	ヤマトシロアリは塊状の巣は作らず、食害箇所が巣となる。乾燥に弱く、常に湿った木材など多湿な場所を好む。有翅虫の群飛は、4月から5月頃にみられる。日本に広く分布する。
フローリングの部屋に虫がみられる	 成虫、灰褐色、約2mm	トビムシ目の一種 (トビムシ目)	トビムシ目の多くは土壌の表面、落ち葉中に生息する。雑食性であり、落ち葉や腐植物、菌類などを食べる。一般に繁殖力が高く、好適条件下で大量発生することがある。
2階水洗トイレで発見した	 半透明、約35mm	ミズ綱の一種 (貧毛綱)	ミズ綱の体は、多数の規則正しい環状の体節からなり、体表に短い剛毛がみられる。陸生種、水生種に大別される。日本ではシマミズが代表的な陸生種で、ゴミ捨て場、堆肥の近くや台所の流し付近の湿った場所に住む。
2階ベランダや天井裏に糞がみられる	 糞、黒色、約8～13mm	コウモリの糞	コウモリの糞の形態は、らせん状である。糞の内部には多数の昆虫片が認められた。

* 写真は、群飛後に翅を落とした個体です。またシロアリの有翅虫と羽アリ(ハチ目)の見分け方について、検査情報月報 平成22年7月号P2に解説が掲載されています。

【 検査研究課 医動物担当 】

感染症発生動向調査委員会報告 6月

《今月のトピックス》

- 腸管出血性大腸菌感染症が増加しています。
- 咽頭結膜熱が、磯子区、緑区で警報レベルです。
- 水痘が、鶴見区、緑区、瀬谷区で注意報レベルです。
- 伝染性紅斑が、中区、港南区、青葉区、栄区で警報レベルです。
- 手足口病の流行に注意が必要です。

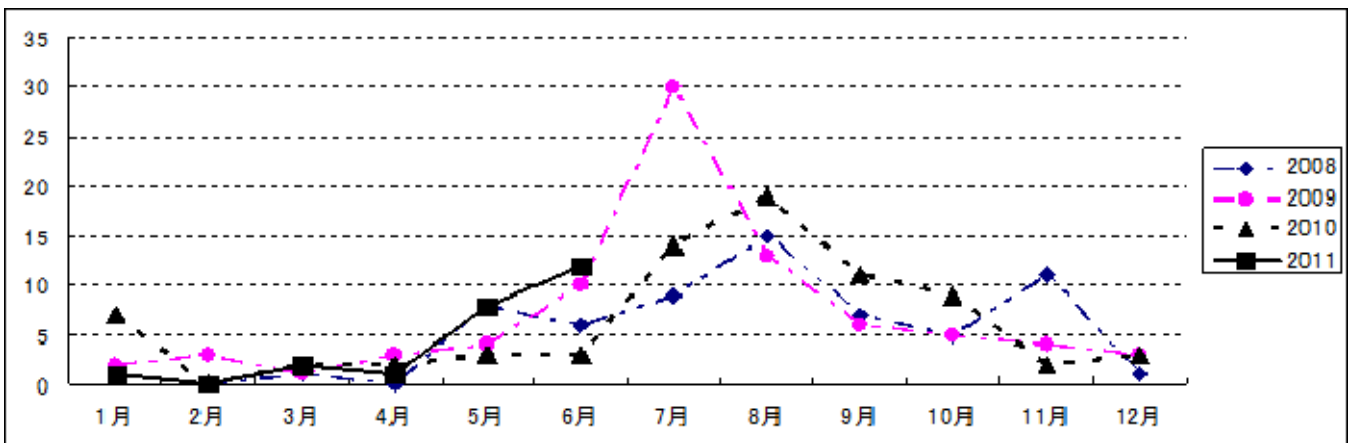
全数把握疾患

<細菌性赤痢>

1件の報告がありました。菌種は*Shigella sonnei* です。国内での感染が推定されています。

<腸管出血性大腸菌感染症>

12件(O157VT1VT2が8件(うち3件は家族内感染)、O157VT2が2件、O26VT1が1件、O26VT1VT2が1件)の報告がありました。特定の飲食店等での集団感染はありませんでしたが、家族内での発生が見られ、家庭内での調理や食事にも注意が必要です。例年夏季に感染者数のピークを迎えますが、過去3年間と比較して今年の感染者数の増加は目立っており、今後の注意が必要です。本症は特に抵抗力の弱い乳幼児や高齢者で重症化することがあります。通常、菌は家畜の腸内に存在し、新鮮な肉を購入しても表面に菌が付着している可能性があり、生肉を切った包丁やまな板の洗浄・消毒や、焼肉の生肉を取る箸と食べる箸を区別する等の予防対策が重要です。また菌は熱に弱いので、肉は十分に加熱(中心部まで75℃で1分間以上加熱)し、生肉や加熱が不十分な肉を食べないことが大切です。



<パラチフス>

1件の報告がありました。インドでの感染が推定されています。

<A型肝炎>

1件の報告がありました。ウズベキスタンでの感染が推定されています。

<マラリア>

1件の報告がありました。卵形マラリアで、ザンビア共和国のチパタ(東部州の州都)での感染が推定されています。

<後天性免疫不全症候群>

3件(無症候期)の報告がありました。

<麻しん>

4件の報告(成人3件、幼児1件)がありました。いずれも臨床診断例です。近隣の自治体では、2011年1月～6月22日までに東京都の麻しん累積患者数が148件にのぼり、流行が続いているので、今後の状況に引き続き注意が必要です。対象者への確実な予防接種の実施が望まれます。

※各感染症については、横浜市衛生研究所HPをご参考ください。

<http://www.city.yokohama.lg.jp/kenko/eiken/idsc/disease/>

定点把握疾患

平成23年5月23日から6月26日まで(平成23年第21週から第25週まで。ただし、性感染症については平成23年5月分)の横浜市感染症発生動向評価を、標記委員会において行いましたのでお知らせします。

平成23年 週一月日対照表

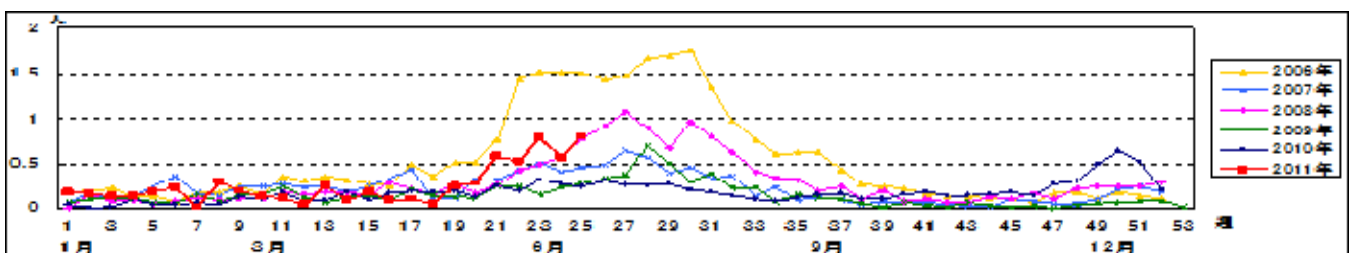
第21週	5月23日～29日
第22週	5月30日～6月5日
第23週	6月6日～12日
第24週	6月13日～19日
第25週	6月20日～26日

1 患者定点からの情報

市内の患者定点は、小児科定点:92か所、内科定点:60か所、眼科定点:19か所、性感染症定点:27か所、基幹(病院)定点:3か所の計201か所です。なお、小児科定点は、インフルエンザと小児の11感染症を報告します。内科定点はインフルエンザのみを報告します。従ってインフルエンザは、小児科と内科で、計152定点から報告されます。

<咽頭結膜熱>

第25週では、磯子区で定点当たり5.75、緑区で4.00と、警報レベルを上回りました。磯子区では5週間警報レベルが持続しています。市全体では0.79と警報レベルに至っていませんが、漸増しており、例年初夏から流行が見られる疾患ですので、今後の推移に注意が必要です。25週では、全国0.77、県域(横浜、川崎、相模原市除く)0.68、川崎市0.44、東京都0.75でした。

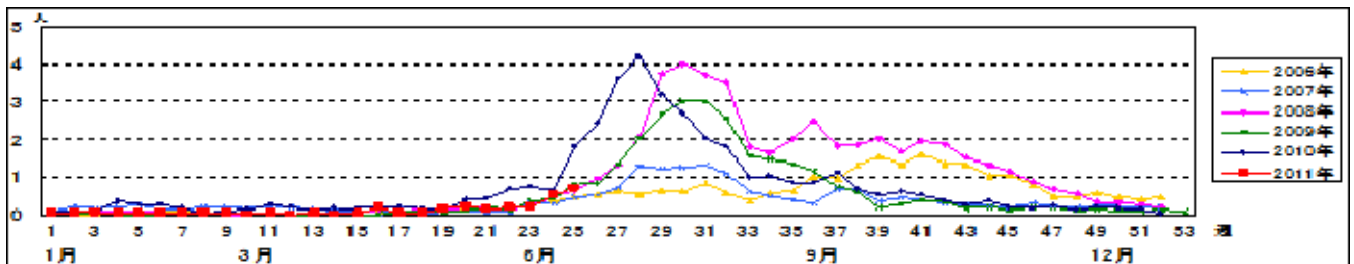


<水痘>

第25週では、鶴見区4.20、緑区5.40、瀬谷区4.75で注意報レベルとなっています。緑区では3週間注意報レベルが持続しています。市全体では2.07と3週間連続で低下していますが、例年初夏に流行が見られる疾患ですので、今後の推移に注意が必要です。25週では、全国1.65、県域2.88、川崎市1.09、東京都1.21でした。

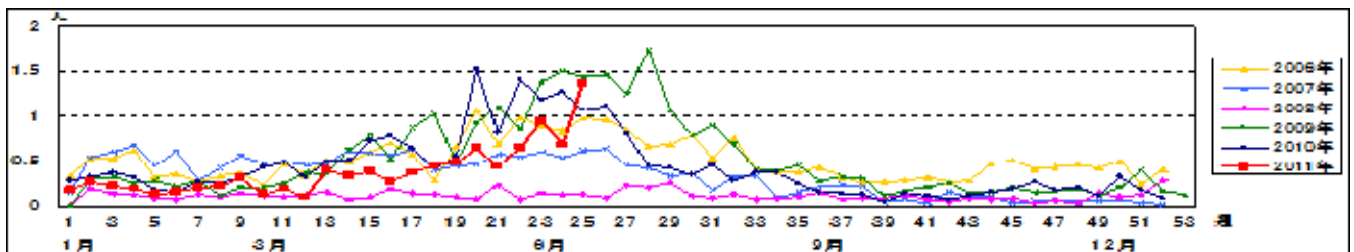
<手足口病>

第25週では警報レベルの区は無く、市全体でも落ち着いていますが、市全体の24週0.51から25週0.70とやや増加しており、この立ち上がりのパターンは2008年と酷似しています。2008年は29、30週頃(7月下旬)に流行のピークを迎えたので、今後の警戒が必要です。25週では、全国4.27(主に西日本で流行)、県域0.36、川崎市1.19、東京都1.34でした。



<伝染性紅斑>

第25週では、中区5.50、港南区2.20、青葉区2.17、栄区4.25と警報レベルを上回りました。栄区では6週間警報レベルが持続しています。市全体では1.38ですが、24週の0.69からほぼ倍増しており、例年初夏から流行が見られる疾患ですので今後の推移に注意が必要です。25週では、全国1.47、県域1.33、川崎市1.69、東京都1.37でした。



<性感染症>

性感染症は、産婦人科系の10定点、および泌尿器科・皮膚科系の17定点からの報告に基づき、1か月単位で集計されています。5月では、性器クラミジア感染症は男性が19件、女性が17件でした。性器ヘルペス感染症は、男性が7件、女性が9件です。尖圭コンジローマは男性7件でした。淋菌感染症は、男性が15件、女性が1件でした。

<基幹定点週報>

5月は第21週に無菌性髄膜炎の報告が1件(4歳男児)、マイコプラズマ肺炎が第25週に1件(8歳女児)ありました。マイコプラズマ肺炎は、第4～6週に4件報告されて以来の報告です。細菌性髄膜炎は今年に入って1件もありません。クラミジア肺炎は第14週に1件報告されたのみです。

< 基幹定点月報 >

5月は、メチシリン耐性ブドウ球菌感染症6件、ペニシリン耐性肺炎球菌感染症、薬剤耐性緑膿菌感染症、薬剤耐性アシネトバクター感染症の報告はありませんでした。

【 感染症・疫学情報課 】

2 病原体定点からの情報

市内の病原体定点は、小児科定点:9か所、インフルエンザ(内科)定点:3か所、眼科定点:1か所、基幹(病院)定点:3か所の計16か所を設定しています。

検体採取は、小児科定点とインフルエンザ定点では定期的に行っており、小児科定点は9か所を2グループに分けて毎週1グループで実施しています。また、インフルエンザ定点では特に冬季のインフルエンザ流行時に実施しています。

眼科と基幹定点では、検体採取は対象疾患の患者から検体を採取できたときにのみ行っています。

< ウイルス検査 >

6月に病原体定点から搬入された検体は、小児科定点49件(鼻咽頭ぬぐい液42件、ふん便・直腸ぬぐい液7件)、基幹定点1件(髄液1件)、眼科定点2件(眼脂2件)でした。患者の臨床症状別内訳は、小児科定点は上気道炎22人、下気道炎9人、胃腸炎6人、突発性発疹症疑い、手足口病、流行性耳下腺炎、りんご病各2人、咽頭結膜熱、ウイルス性発疹症、EB(Epstein-Barr)ウイルス感染症、発熱のみ各1人、眼科定点は流行性角結膜炎1人、急性結膜炎1人、基幹定点は無菌性髄膜炎1人でした。

7月10日現在、小児科定点の上気道炎患者2人と下気道炎患者2人、基幹定点の無菌性髄膜炎患者1人からパラインフルエンザウイルス3型が、小児科定点の上気道炎患者1人と咽頭結膜熱患者1人、眼科定点の流行性角結膜炎患者1人からアデノウイルス(型未同定)が分離されています。

これ以外に遺伝子検査では、小児科定点の上気道炎患者3人と下気道炎患者2人、突発性発疹症疑い患者1人からヒトメタニューモウイルス、下気道炎患者1人からRSウイルス、下気道炎患者1人からコクサッキーAウイルス16型、下気道炎患者1人からアデノウイルス3型、下気道炎患者1人からヒトコロナウイルスOC43型、胃腸炎患者1人からアデノウイルス40/41型の遺伝子が検出されています。

その他の検体は引き続き検査中です。

【 検査研究課 ウイルス担当 】

< 細菌検査 >

6月の感染性胃腸炎関係の受付は小児科定点からの検体はなく、基幹定点から菌株受付が30件、定点以外の医療機関等からは18件あり、赤痢菌、腸管病原性大腸菌、腸管出血性大腸菌、腸管毒素原大腸菌、パラチフスA菌、サルモネラ、カンピロバクター等が検出されました。

溶血性レンサ球菌咽頭炎の検体受付は小児科定点から10件で、A群溶血性レンサ球菌(血清型はT1、T3、TB3264)、インフルエンザ菌、肺炎球菌が検出されました。

表 感染症発生動向調査における病原体検査(6月)

感染性胃腸炎

検査年月 定点の区別 件数	6月			2011年1月～6月		
	小児科	基幹	その他*	小児科	基幹	その他*
	0	30	18	2	68	32
菌種名						
赤痢菌			1		2	2
腸管病原性大腸菌		1			3	
腸管出血性大腸菌			11			17
腸管毒素原性大腸菌		1			2	
パラチフスA菌		1			3	
サルモネラ		15			15	3
カンピロバクター			3			3
黄色ブドウ球菌					1	1
コレラ菌						1
クロストリジウム			1			1
不検出	0	12	2	2	42	4

その他の感染症

検査年月 定点の区別 件数	6月			2011年1月～6月		
	小児科	基幹	その他*	小児科	基幹	その他*
	10	0	0	44	4	24
菌種名						
A群溶血性レンサ球菌	T1	1		7		
	T3	2		3		
	T4			3		
	T12			8		
	T25			2		
	T28			4**		1
	T B3264	3		5		
	型別不能			2		
B群溶血性レンサ球菌						3
メチシリン耐性黄色ブドウ球菌					4	
バンコマイシン耐性腸球菌						15
<i>Achinomyces</i>						1
<i>Branhamella</i>				1**		
<i>Legionella pneumophila</i>						3
インフルエンザ菌		2**		4**		
肺炎球菌		3**		4**		
不検出	1	0	0	7	0	1

*: 定点以外医療機関等(届出疾病の検査依頼)

** : 同一検体から複数菌検出

T(T型別): A群溶血性レンサ球菌の菌体表面のトリプシン耐性T蛋白を用いた型別方法

【 検査研究課 細菌担当 】

衛生研究所WEBページ情報

(アクセス件数・順位 平成23年5月分、電子メールによる問い合わせ・追加・更新記事 平成23年6月分)

横浜市衛生研究所ホームページ(衛生研究所WEBページ)は、平成10年3月に開設され、感染症情報、保健情報、食品衛生情報、生活環境衛生情報等を提供しています。

今回は、平成23年5月のアクセス件数、アクセス順位及び平成23年6月の電子メールによる問い合わせ、WEB追加・更新記事について報告します。

なお、アクセス件数については総務局IT活用推進課から提供されたデータを基に集計しました。

1 利用状況

(1) アクセス件数 (平成23年5月)

平成23年5月の総アクセス数は、256,370件でした。主な内訳は、感染症68.6%、食品衛生10.0%、保健情報7.1%、検査情報月報4.7%、生活環境衛生2.3%、薬事1.0%でした。

(2) アクセス順位 (平成23年5月)

5月のアクセス順位(表1)は、第1位が「髄膜炎菌性髄膜炎」、第2位が「マイコプラズマ肺炎について」、第3位が「衛生研究所トップページ」でした。

第1位は「髄膜炎菌性髄膜炎」でした。これは、宮崎県が、5月17日に宮崎県小林市の高校1年生の男子が、髄膜炎菌性髄膜炎のため、5月13日に死亡した疑いがあると記者発表したことを受け、この報道がYAHOOのトップニュースに取り上げられ、そこから当所の「髄膜炎菌性髄膜炎のWEBページ」へリンクされていたためアクセス件数が増えたものと思われる。

髄膜炎菌による髄膜炎を、髄膜炎菌性髄膜炎といい、大規模な流行性の髄膜炎の起原菌であることから、以前は「流行性脳脊髄膜炎(または流行性髄膜炎)」と呼ばれ、旧・伝染病予防法の下では法定伝染病の一つでした。

第2位の「マイコプラズマ肺炎について」は、年間を通じて常にアクセス件数が多く、毎月上位にランクインしています。国立感染症情報センターの報告によりますと、マイコプラズマの定点当たり報告数は、第19週(5月9日～5月15日)以降、4週間連続で増加しています。

第3位は、「衛生研究所トップページ」、第4位は、「ポリオ(小児麻痺・急性灰白髄炎)について」でした。

第5位に「アデノウイルス感染症について」が入りました。

表1 平成23年5月 アクセス順位

順位	タイトル	件数
1	髄膜炎菌性髄膜炎	57,083
2	マイコプラズマ肺炎について	6,615
3	衛生研究所トップページ	4,667
4	ポリオ(小児麻痺・急性灰白髄炎)について	4,649
5	アデノウイルス感染症について	3,487
6	B群レンサ球菌(GBS)感染症について	2,818
7	ぎょう虫(蟻虫)症について	2,759
8	ロタウイルスによる感染性胃腸炎について	2,648
9	横浜市感染症情報センター	2,550
10	サイトメガロウイルス感染症について	2,493

データ提供:総務局IT活用推進課

第7位の「ぎょう虫(蟯虫)症について」は、学校保健安全法に基づいて幼稚園児及び小学校低学年対象に実施されるぎょう虫検査(セロハンテープ法)の時期のため、アクセス件数が増加したものと考えられます。

(3) 電子メールによる問い合わせ (平成23年6月)

平成23年6月の問い合わせは、5件でした(表2)。

表2 平成23年6月 電子メールによる問い合わせ

内容	件数	回答部署
リステリア症について	1	感染症・疫学情報課
ノロウイルスWEB情報の複写許諾について	1	感染症・疫学情報課
食品苦情検査「餃子中の異物」記事の転載許諾について	1	感染症・疫学情報課 (検査研究課に確認後)
梅毒について	1	感染症・疫学情報課
当所ホームページとの相互リンクについて	1	感染症・疫学情報課

2 追加・更新記事 (平成23年6月)

平成23年6月に追加・更新した主な記事は、1件でした(表3)。

表3 平成23年6月 追加・更新記事

掲載月日	内容	備考
6月 6日	感染症に気をつけよう(6月号)	追加

【 感染症・疫学情報課 】